

日本教育学会北海道地区公開シンポジウム（北海道教育学会共催・室蘭工業大学後援）

地域連携と大学

——室蘭工業大学の事例から——

日 時：2018年3月3日（土）13：30～16：30

場 所：室蘭工業大学・教育研究1号館・C107室

アクセス：JR 東室蘭駅・東口より〈循2〉鷲別経由・工大行き、「工大」下車（約20分）。

JR 東室蘭駅・西口より〈6〉ろう学校行き、「工大」下車（約20分）。

*東口（1時間に2本程度）と西口（1時間に1本）に分かれて発車しております。

下記HPにて事前に時刻を確認することをおすすめいたします。

<http://donanbus.co.jp/muroran/>

JR 東室蘭駅・西口より、タクシー乗車、約15分

*札幌からお越しになる場合、特急スーパー北斗・北斗に比べ、特急すずらんの特急料金が安く設定されています。ご都合に合わせてご利用ください。

備 考：どなたでも自由に参加できます（事前申込み不要・無料）。

コーディネーター：前田潤（室蘭工業大学）

世 話 人：姉崎洋一（北海道大学（名））・篠原岳司（北海道大学）・阿知良洋平（室蘭工業大学）

コメンテーター：山本健慈（国立大学協会・専務理事、元和歌山大学長）

担当理事：姉崎洋一・庄井良信（北海道教育大学）

司 会：前田潤・姉崎洋一

趣 旨：シンポジウムでは、室蘭工業大学の「地域連携」に関わって、地域の声・学生の声に真摯に耳を傾けてきた4人の方々に登壇して頂く。まずは、地域のニーズや現状と大学とをどのようにつないでこようとしてきたのか、していこうとしているのかについて、それをめぐる葛藤や成果、課題などを率直に自由に出してもらいたい。そこでは、研究者が生み出す新技術が地域の内発的な力と結びつく過程の葛藤、学生と農家の相互作用のなかから生まれる技術や社会あるいは生き方の問い直し、地域の暮らしの悩みを率直に出しあえる関係性を築く手がかりなど、多様な実践知が出されるだろう。会場全体のみなさんのお力をお借りして、これらの事例の持っている魅力をさらに引き出し、真の意味でボトムアップな地域づくりを支える大学の「連携」のあり方、およびそこで生まれる教育のあり方について、何らかの輪郭を掴んで行ければ幸いである。

報告1：新技術導入と地域住民

板倉賢一（室蘭工業大学）

石炭地下ガス化（UCG）は古い技術であるが、低環境負荷であるため再び注目されている。我々の目指す安全で高効率な UCG 技術の研究開発に注目してくれたのが、2011 年当時の三笠市長であった。未利用石炭エネルギーを地域に還元する「エネルギーの地産地消」を、構想していた。本学は三笠市と 2012 年に包括連携協定を結び、幾春別に室蘭工業大学三笠未利用石炭エネルギー研究施設を設け、文科省の支援のもと、新技術の開発を始めた。毎年、北大の学生や教職員も含め、十数名が施設に 1 ヶ月ほど宿泊して実験を行ってきた。本年度は、石炭層からガスを回収し、環境への影響が無いことを確認する実験に成功した。この間、三笠市民の理解を得るために、毎年、市民向け研究報告会や実験見学会、地元中学 2 年生向け体験学習会等を学生と共に実施してきた。これにより学生は、自らの研究の目的と意義を一層強く認識するようになった。今後もこうした活動を続け、UCG の実用による地域創生を目指す予定である。

報告2：室蘭工業大学と新冠農業実習

松本健（新冠町農家） 澤田紋佳（室蘭工業大学）

室蘭工業大学には夏休みの期間を利用した「新冠農業実習」があり、「社会体験実習」という選択科目の一つである。10 名前後の学生が北海道の日高地方にある新冠町で、畑作・水田・軽種馬・酪農などの農家に 10 日間寄宿し、家族の一員として生活しながら農業の体験をする。2000（平成 12）年に始まり、これまでの公式実施回数は 16 回で、延べ 200 人以上の学生が自然や人との交流を経験した。「工業大学で農業実習」という異業種交流は、専門知識に偏りがちな学生の価値観を変え、分野を横断した広い視野で物事を考えることの大切さを知る機会となっている。また、受け入れ農家は、実習を通して学生が農業の大切さを実感している様子から、農業に対する自信や責任を持つようになった、と語る。本報告では、「学生として参加した立場」と「受け入れ農家の立場」の両面から、農業実習の教育的な側面と地域とのつながりについて考える。

報告3：大学で芽吹く市民が学び合う自主講座—シェアリング教育研究会の取り組み

今野博信（学泉舎・室蘭工業大学・非常勤）

学校や職場での人付き合いは、相互の歩み寄りが大事です。ところが、暗黙の了解や場の雰囲気、関係づくりを支配することがあります。いわゆる「空気を読む」ことに長けた人が、それを苦手とする人を除け者扱いにすることが起こり得ます。曖昧さを自己に都合良く解釈し、それを他に強要する社会は、発達障害の当事者を困惑させます。

私たちは、発達障害について知ることから始めて、広く「生きづらさ」を感じている人びとの思いに寄り添おうと学び合っています。さらには、「生きづらさを個人に強いる社会」とは何だろう、と学びの幅を広げているところです。毎月 2 回 10 名ほどで例会をもち、これまでに、引きこもりや LGBT についても取り上げました。

より良い社会づくりに関心をもつ市民が、学ぶ場を求めた時にその場を提供できる大学の存在は大きいです。気軽に学び合えて、しかも年代幅の広いメンバーが集まれる場は貴重です。市民側からの要求に大学が応えていく形で、学生と社会人と大学のもつリソースが混じり合って活動している自主研究会について報告します。

問合せ先：北海道教育学会事務局 HSSE_office（アットマーク）edu.hokudai.ac.jp